

平成25年11月30日(土)

第443回 史跡めぐり

晩秋の名城・八王子城跡と多摩御陵



山頂の八王子権現 916年
華嚴菩薩妙行が祀る 八王子
の地名由来となった



八王子城 本丸跡

NPO 法人 越谷市郷土研究会

八王子城と 多摩御陵巡り



コースガイド

第443回 史跡巡り

晩秋の名城・八王子城跡と多摩御陵

日本百名城・八王子城、大正・昭和天皇が眠られる多摩御陵
などを晩秋にたどるバスの旅

日 時 平成二十五年十一月三十日(土)

集 合 北越谷駅西口広場 午前七時三十分

参加費 二六、五〇〇円 (バス代・昼食代・入館料等)

案内者 副会長・渡辺和照 理事・坂本誠一郎

北越谷駅 — (高速道) — 八王子IC

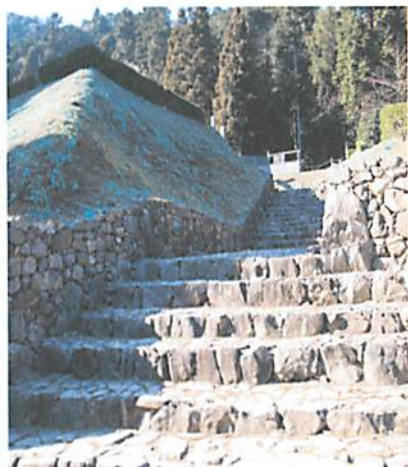
- ① 日本百名城・八王子城跡
- ② 昼食 (八王子城跡ガイド施設)
- ③ 武蔵陵墓地 (大正天皇・多摩陵)
及び (昭和天皇・武蔵野陵)
- ④ 信松院 (松姫様のお墓と文化財拝観)
- ⑤ 八王子郷土資料館
- ⑥ 道の駅・八王子滝山
- ⑦ 八王子IC—北越谷駅

※車窓より「宗関寺」・「氏照及び家臣墓」・「廿里古戦場」・「甲州街道」・「滝山城」・「大善寺」など拝観・遠望

北越谷駅 18:30 帰着予定



八王子城 「曳橋」と「虎口」



● 八王子市の今昔（概要）

- ・ 現況 東京府時代（1943迄）は東京府に次いで1917年に2番目に市制移行。人口約58万人で東京都内の市町村ではNO1。全国の市町村の中でも第23位（政令指定都市を除けば、第3位）
- ・ 人口の特徴は、①昼間の人口と夜間人口がほぼ同じ②学生が10万余人＋教師約8千人がおり、平均年齢が非常に若いことです。
- ・ 1986年に国交省より業務核都市に指定。また2015年に中核市に移行の予定です。

- ・ 地理 中世から近世・近代に至るまで東西を走る甲州街道と、川越・桐生・日光（千人同心街道）など関東北西部、小田原・鎌倉・横浜（浜街道）など南西部・南東部を結ぶ街道が交差する交通の要衝であり、江戸時代には、甲州街道の宿場町として栄えました。
- ・ かつて絹織物産業・養蚕業が盛んであった為に「桑の都」及び「桑都（そうと）」という美称があります。
- ・ 11世紀 武蔵七党の一つ「横山党」の拠点です。

● 八王子の地名と由来

八王子神社は、牛頭天王とその眷属神（けんぞくしん・主神につき従う神々）である八人の王子を祀る信仰と共に、全国に点在しました。そしてこの地の八王子権現は、延喜16年（916）に華嚴菩薩妙行が深沢山今の八王子城址の頂上に近い平地に祀ったといわれ、地名の由来になったとされています。（宗関寺伝「開山華嚴菩薩妙行和尚伝並序」による）

- ・ 八王子神社を中心としたこの地域が、いつごろから「八王子」と呼ばれ始めたかは、はっきりしていません。記録として残されているものは、永禄12年（1569）5月8日付け北条氏康の書状が今のところ最初のもので、この書状の中で「八王子方面」の意味で「八王子筋」という表現を使っています。

● 八王子の歴史年表

- ・ 別添資料⑭頁参照ください。

● 八王子城

- ・ 八王子城については、後段⑫頁⑬頁貼付資料ご参照ねがいます。

● 滝山城跡



大永元年（1521）武蔵国守護代大石定重が築き、高月城から移転したと伝えられ、その後大石定久の養子として入城した北条氏照が八王子城に移転するまで、関東屈指の城郭としてその威容を誇った「丘山城」。多摩川の浸食によって形成された加住丘陵の複雑な地形と急峻な断崖を利用して築かれた天然の要塞で、多摩川から比高約70m。空堀・土塁・井

戸等遺構の残存状態も良い。天文5年（1536）に北条氏康、同12年（1552）には上杉謙信、永禄12年（1569）には、武田信玄の攻撃を受けているが、いずれも持ちこたえている。しか

し信玄の攻撃を受けた後、甲州勢に対する戦略的な見地から、氏照は城を「山城」たる八王子城に移したと伝えられています。

・現在、城の大部分は、東京都の自然公園になっており、桜の名所でもあるが、城郭そのものの見学は、葉が落ちた晩秋から初春にかけてが最も適しています。

● 廿里（とどり）古戦場

・永禄12年（1569）、武田信玄は小田原城の北条氏康を攻める為に甲州を8月下旬に出発し、碓氷峠を越えて北関東の北条氏の諸城を次々と攻撃し、滝山城攻撃のため拝島に陣した。



・一方、信玄の武将甲州岩殿城主小山田信茂は、甲州から小仏峠を越えて9月下旬に攻め込んだ。滝山城主北条氏照の家臣、横地監物・中山勘解由家範、布施出羽守らは、廿里にて迎え撃つたが、一戦にして脆くも破れ去った。

・この戦いの後、滝山城は三の丸まで攻め込まれ、落城の危機に瀕したが、信玄は途中で小田原に向かい、落城は免れました。

● 三増（みませ）峠の戦い

右記、廿里・滝山城の戦いの後、武田信玄は10月1日、小田原城下に軍をすすめ包囲した。しかしかかつて上杉謙信が10万以上の兵

力で攻めたが不落であり、今回の信玄は、挑発するも小田原方が籠城したので、4日後に城下に放火後、軍を退いた。信玄は甲斐に帰陣の際、現相模原市近くの三増（みませ）峠を越えようとした。そこで北条軍は10月6日、氏照・氏邦が三増峠で武田軍を待ち伏せし、小田原を出陣した氏政と挟み撃ちの作戦で攻撃しようとした。戦局は二転三転したが、小田原からの氏政軍が到達せず、結果的には北条軍の大敗となりました。

・この年の一連の戦いで、氏照は滝山城の弱点と甲州口の重要性を感じ、小仏峠に近い八王子城の築城を計画したといわれています。

（八王子市教育委員会）

● 宗関寺（そうかんじ）

寺伝によれば、前述「八王子の地名と由来」の項で触れた、平安時代に華嚴菩薩妙行が開いた寺を北条氏照が、永禄7年（1564）に再興したものである。氏照をはじめ、多くの家臣が参禅した。

八王子城落城のおりに焼失したが、後に卜山舜悦（佛国普照禅師）が氏照の菩提を弔う為に再興し、寺名も彼の法名をとって

「宗関寺」と改めた。その後再び火災に遭

ったが、当時水戸藩家老中山信治（次項の「氏照の墓」参照）により氏照百回忌法要の際に新たに建立されました。



●北条氏照及び家臣墓



・北条氏照は兄、氏政と共に秀吉の命で切腹し、小田原の北条家菩提寺伝心庵に埋葬されたが、氏照百回忌の機に家臣中山家範の孫、信治（八王子城落城時、中山家範一族は、自害を図ったが、家康に助けられた長子の子孫、直張が久留里城藩主を継ぎ、次子信治が水戸家の家老となり栄えた）により建てられた。（★家範の勇猛な働きを家康が耳にして、遺児を取立てた）

・落城時、北条方婦女子や武将らが御主殿の滝上流にて自刃し次々に身を投じ、その血で城山川の水は三日三晩赤く染まったと伝えられ、八王子市では、毎年6月23日に赤飯を炊く風習があった。それは祝祭慶事の為でなく、先述身を投じた人々を弔う後世の人々の手向けの印しで、前記辛くも生き延び、水戸家家老となり一門を弔えることが出来たことは、あの世へ逝った八王子城下一門衆のせめてもの慰めとなり、永き存念の一端を晴らし得たのでした。

●お城の種類

- ・山城・・・五大山城（山岳城）は、別項参照
- ・古代山城・中世山城・近世山城（安土城・八王子城）
- ・平山城（堀路城・熊本城・彦根城・松山城・津山城）
- ・丘山城（滝山城＝平山城の内、丘陵上を城地としたもの）

- ・平城（大阪城・松本城・名古屋城・広島城）
- ・水城・海城（忍城・高松城・今治城）
- ・湖城（松江城・高島城）
- ・島城（来島城・能島城）

●城郭の地区呼称（八王子城について）

- ・要害地区・・・戦闘時に要塞となる地区。本丸、松木曲輪など
- ・居館地区・・・城主・氏照の館・御主殿など
- ・根小屋地区・・・家臣団の屋敷や寺院等集落など
- ・外郭の防御施設群
- ・現在の元八王子1～2丁目に広がる城下町地区

●日本五大山城（山岳城）

- ①月山富田城
 - ②春日山城
 - ③観音寺城
 - ④七尾城
 - ⑤八王子城
- ※八王子城に代り、小谷城をいうこともあります。

●多摩陵・武蔵野陵

・御陵については、後段⑮頁～⑯頁貼付資料ご参照ねがいます。

●信松院について

・曹洞宗の古刹で山号は金龍山。開基は信松禅尼こと信松院殿月峰永琴大禅定尼、開山は師である曹洞宗の名刹、心源院の随翁舜悦ト山和尚（勅賜仏国普照禅師）。1590年（天正18年）に信松



尼が八王子御所水（現・八王子市台町）の草庵に移転したのが創建とされています。保有文化財①木製軍船のひな形（朝鮮の役―文禄・慶長の役に小早川隆景軍が使用した軍船の模型。松姫の兄、仁科盛信の子孫である資真からの寄進）②木造松姫坐像③松姫尼公墓

● 武田信玄公息女

松姫様の生涯



松姫さまは武田信玄の四女として永禄4年（1561）9月に生まれになりました。時あたかも父信玄は、宿敵上杉謙信と雌雄を決すべく川中島に出陣していた時であります。松姫さまは七歳の

ときに、織田信長の嫡子で当時11歳の信忠と婚約いたします。当時の日本は戦国の時代で、とりわけ武田信玄の力が強大であり、新興勢力の織田信長も覇業を達成させんがために、信玄と縁故関係を

結びたいと松姫さまと信忠との政略結婚を意図したのであります。

元亀3年（1572）、信玄は大軍を率いての宿願の上洛の軍を起しました。その信玄の行く手に立塞がったのが徳川家康であり、浜松の北一里にある三方ヶ原で合戦が行われました。その時に織田信長は家康のために援軍を送ります。この合戦は信玄の圧勝となり、信玄は信長が家康に援軍を送ったことで、松姫さまと信忠との婚約を破棄いたします。ところが不幸にも年が明けた天正元年、信玄は旅の途中で病を發して没します。信玄の後を嗣いだ武田勝頼も時代の流れに抗し難く、天正10年3月、織田・徳川両軍の侵攻の前に天目山で討死、ここに甲斐源氏の名門武田家は滅亡するのであります。さてその時の松姫さまはというと、その年の正月に兄、仁科五郎盛信（信玄の五男で、信濃の名門仁科の家名を嗣ぐ）のすすめで、盛信の居城高遠城を訪れておられました。ところが織田の軍勢が攻めてくるという



報せに、急ぎ甲府へ戻られます。その時松姫さまは、兄盛信の四歳になる督姫を連れ、さらに途中葦崎の新府城に立寄って勝頼の姫で四歳になる貞姫や、小山田

信茂の四歳になる香貴姫も伴います。護衛の武士に守られながら一行は、父祖の地甲斐を後にして見知らぬ他国の関東を指して落ちのびられます。そして幾多の難関の末にたどり着かれたのが、武蔵国横山宿（八王子）の恩方村で、一先ず金照庵という小庵に落着かれます。やがて松姫さまは、ほど近くに在る曹洞宗の名刹心源院に随翁舜悦下山和尚（勅賜仏国普照禪師）を訪ねられ、禪師の下で剃髪され



て仏弟子とされます。そして法名を信松禅尼と称されました。御年22歳であります。天正18年、松姫さまは御自身の庵を持たれるべく、当時の上野原宿で御所水の流れも清い景勝の地、御所水の里へ移り住まわれます。そして庵を結ばれた所が現在の信松院であります。この頃の八王子は北条氏照の八王子城も陥落して、関東は徳川家康が管領するところとなります。さて、御所水に住まわれた松姫さまは、武田一族の菩提を弔われる仏道精進の毎日でありましたが、その傍らには糸を

紬ぎ、絹を織られたりして織物の技を里人に伝えられます。又、近隣の子供達には手習いを教えられたりして、土地の人々から大変に慕われ尊まれて平和な日々を送られます。この時に松姫さまが伝えられた織物が、後世八王子織物として発展していくこととなったのです。さて、関東へ入った家康は居城を江戸に定め、甲信への備えの為に八王子に千人同心を配置いたします。この千人同心は、元武田家に仕えていた旧臣達です。又、関東の総代官所を八王子に置き、総代官には大久保長安が任命されました。この大久保長安もかつては武田の家臣でした。異郷で新しい生活に従事する千人同心も、又、大久保長安も八王子に旧主の姫松姫さまがおられるということで、

どれだけ心強く思えたことでありましょう。家康も、信玄の姫松姫さまが八王子におられるを知って寺領を贈り、時折に消息を尋ねたりしてなぐさめられます。天下を統一した豊臣秀吉も慶長3年に病没し、天下は家康のものとなり、ここに江戸幕府三百年の礎が築かれます。時は移り元和2年4月16日(1616)戦国の時代を力強く生き抜かれた松姫さまは、温かい人々に看まもられながら、眠るが如くに他界せられたのであります。御年56歳でありました。法名信松院殿月峰永琴大禅定尼。奇しくもその翌17日には徳川家康も逝去せられて、後に日光東照宮に祀られます。この東照宮の守護に就いたのが八王子千人同心であり、それが明治維新まで続いたことは、松姫さまをめぐっての奇しき因縁とも申せましょう。

参考・武田信玄の子女について

・勝頼

⇔

正室 遠山夫人(父は美濃国遠山氏・母は織田信長の妹)

継室 北条氏康の娘(氏政の妹)

・長女 黄梅院・・・北条氏政の室

・二女 見性院・・・穴山梅雪の室(後の保科正之の養母)

・三女 真理姫・・・木曾義昌の室

・四女 信松尼(松姫)・信長長男信忠と婚約

・五女 甲斐御前(菊姫)・・・上杉景勝の室

郷土歴史資料館



・館の誕生 昭和38年頃、中央高速自動車道の建設に伴い、市内宇津木町向原遺跡の発掘が行われ、多くの土器や石器が出土しました。これを契機に、八王子の歴史資料を収集・保存しようという市民運動がおきました。昭和39年には、市内の陶芸家井上郷太郎氏が収集した貴重な考古資料約1000点が市に寄贈され、ますます貴重な資料を保存・公開する施設を求める市民の声が高まり、東京オリンピック開催の記念事業の一つとして、展示・収蔵施設が建設されることになりました。こうして昭和42年4月1日に八王子市郷土資料館が開館しました。

甲州道中

・成り立ち 江戸に幕府を開いた家康は、慶長6年(1601)日本橋を起点として、公用の旅行や物資の輸送に備え、東海道に伝馬制を制定。そして各宿に人馬の継立や宿泊施設の整備をし、順次五街道など幹線道路整備を順次行つた。甲州道中は、中世からの甲斐国と武蔵国とを結ぶ道を基礎として、当初は、江戸から甲府までが整備され、その後中山道と合流する下諏訪まで延長された。元は甲州海道と呼ばれたが、承徳6年(1716)に甲州道中に改称した。道程約53里(208.5km)で、内藤新宿から上諏訪まで45

宿32継といわれる。甲州道中では、各宿で人足25人・馬25疋の常備が定められました。



・八王子宿 天正18年(1590)八王子城が落城した後、その城下から現在の八王子市街である横山に横山宿・八日市宿・八幡宿を再建し、その後八木宿が作られ、新しい町がつくられていった。また、小門町付近は、代官屋敷が立ち並び、代官頭大久保長安のもとで整備された。八王子宿は十五の宿からなるが、横山・八日市の二宿が伝馬宿としての人馬の継ぎ立ての一切を取り扱う問屋や本陣・脇本陣が置かれました。(偶数月と奇数月で交代した。六斎市は、四・八の市)

・甲州道中の通行

・小仏峠は甲州道中で最も重要視された堅固な関所で、通行には身元の確認となる手形が必要であった。現在でもその小仏関跡には手形を載せる台が残っています。参勤交代で通行したのは、高島藩・高遠藩・飯田藩の信州三藩のみ。寛永9年(1632)からの宇治のお茶を献上する「茶壺道中」・享保9年(1724)幕府直轄領となった後の甲府の政務・甲府城守護の為の甲府勤番の通行・江戸

との連絡などで利用した八王子千人同心の通行などがありました。一方民間では、富士山登山の「富士詣」久遠寺参詣の「身延詣」さらには、横浜開港後の輸出用生糸の輸送「絹の道」などへ利用されました。

・新時代の甲州街道へ



江戸と信州を結ぶ道として重要だった甲州道中も明治5年(1872)に問屋制を含む宿駅制度が廃止され、民営の陸運会社が設立された。明治13年(1880)には馬車が、明治22年(1889)には甲武鉄道(中央線)新宿―八王子間が開通し、交通手段は変化した。そして明治21年(1888)には大垂水峠が開削され、道路の法令により国道に指定され「甲州街道」と呼ばれるようになりました。

・(注)「小仏関」は、天正年間に北条氏照が、甲州武田勢の侵攻に備えて小仏峠の頂上に設置したのが始まりで、天正8年 麓の駒木野に移り、北条氏滅亡後、元和2年(1616)家康により現在地に移された。番所は明治2年(1869)取り壊された。往時は川村・佐藤・小野崎・落合の4家が関守を務めました。

● 八王子千人同心

千人同心については、後段⑩頁資料ご参照ねがいます。

● 大久保長安(ながやす)

・大久保長安(1545〜1613) 大和国・金春流猿楽師・大藏太夫信安の次男。父と共に甲斐国に流れ、猿楽でなく家臣として武田信玄・勝頼に仕えた。武田家滅亡後、家康の家臣となり、甲斐



大久保長安像

国の所務方として、釜無川・笛吹川堤防復旧・金山採掘で内政再建。1590年小田原征伐後関東に入る。伊奈忠次と共に関東代官頭として家康直轄領の事務差配の一切を任せられる。1591年氏照の旧領

をそのまま与えられ、八王子に陣屋を置き、宿場建設や浅川の石見土手を築く。また家康に対し、武蔵国の治安維持と国境警備の重要性について指摘、八王子五百人同心を誕生させ、1599年には、同心を倍増し八王子千人同心となりました。1600年の関ヶ原の戦いが起こると徳川秀忠軍の輜重役を務め、戦後は佐渡金山・石見銀山等の検分役・併せて甲斐奉行・美濃代官等に任じられ、従五位下石見の守に叙任され、家康6男・松平忠輝の附家老に。更には佐渡奉行や同時に年寄(後の老中)にも列せられた。また関東の道路

整備・一里塚建設も任され、現在の里程標「一里〓36町、一町〓60間、一間〓六尺」という間尺をも整えました。(注) 間尺は伊奈の「備前繩」も有名です。

・慶長18年(1613) 卒中にて没するや「金山の統括権を隠れ養に不正蓄財あり」とのことで、7人の男子全員が処刑され、家康は埋葬された長安の遺体を掘り起こして、駿府城下、安倍川の川原に斬首して晒し首にしています。

・逸話 30歳近くまで全く「徳川と関りが無い外様」だが、老中に就いた唯一の人物。無類の女性好きで、側女を70人から80人抱え、自分の遺体を「黄金の棺」に入れ、華麗な葬儀をするよう遺言したともいわれています。

・長安の陣屋跡は、小門町の産千代稻荷境内に碑があります。

● 吞龍上人ゆかりの「大善寺」



・浄土宗 観池山往生院大善寺 永禄年間(1558〜70)に北条氏照が菩提寺として滝山城下に創建したと伝えられているが、定かではない。氏照の八王子城移転とともに八王子城下に移転し、さらに天正18年(1590)八王子城落城により市内大横町へ移転し、それより約350年間に渡り昭和36年現在地に移転するまでの間、「大横町の大善寺」として親しまれて参りました。

・江戸時代は、関東18壇林の一つで、特に第3世住職然譽吞龍は、あの「子育て吞龍さま」です。越谷林西寺を中興のあと、当寺に栄進され、その後、家康公の絶大な信を得て「太田大光院」の開山僧

にられた方です。当寺は、浄土宗年中仏事最大の行事である「十夜(じゅうや)法要は八王子のお十夜」と知られ、300余年の伝統を有しています。

・当寺の「銅造梵鐘」は、市内に現存する最古の梵鐘。代官竹本権右衛門・町奉行近山与左衛門・町年寄衆田中五郎左衛門、新野与五右衛門などが大旦那となり、今当安寧を願って寛永3年(1626)に鑄造。加藤甚左衛門尉長重の作であります。

また当寺が運営する隣接の「富士見台霊園」には、「松本清張のお墓があります。」



▲大善寺境内図 [高永4年(1851)頃]

● 八王子「明治の大火事」

・新万火事 東京都編入の5ヶ月後、明治26年(1893)8月6日横山町の大通り北側の遊郭新万楼から出火し、横山町に軒を並

べた遊女屋18軒を初め、火は八日町を延焼し、世間では、「新万火事」と称する大火事が発生しました。(約750軒焼失)

・上記の復興も成らざるうちに、明治30年(1897)4月22日、大横町西側でのランプ掃除の失火が原因で、折柄当日は強い西風が吹き荒れていたため、大横町以東の八王子町は、瞬時にして火の海と化し、八王子は焦土の町と化しました。「明治30年の大火」と称し、八王子災害史に大きく記録されています。この大火事で八王子の再起復興は危ぶまれましたが、各方面の同情、町民の自発的奮により七万五千円の道路改装費の公債を発行し、約12,000坪の敷地を買収し復興にあたり、今日の市街地の基盤を確立したのであります。

● 第二次大戦の空襲

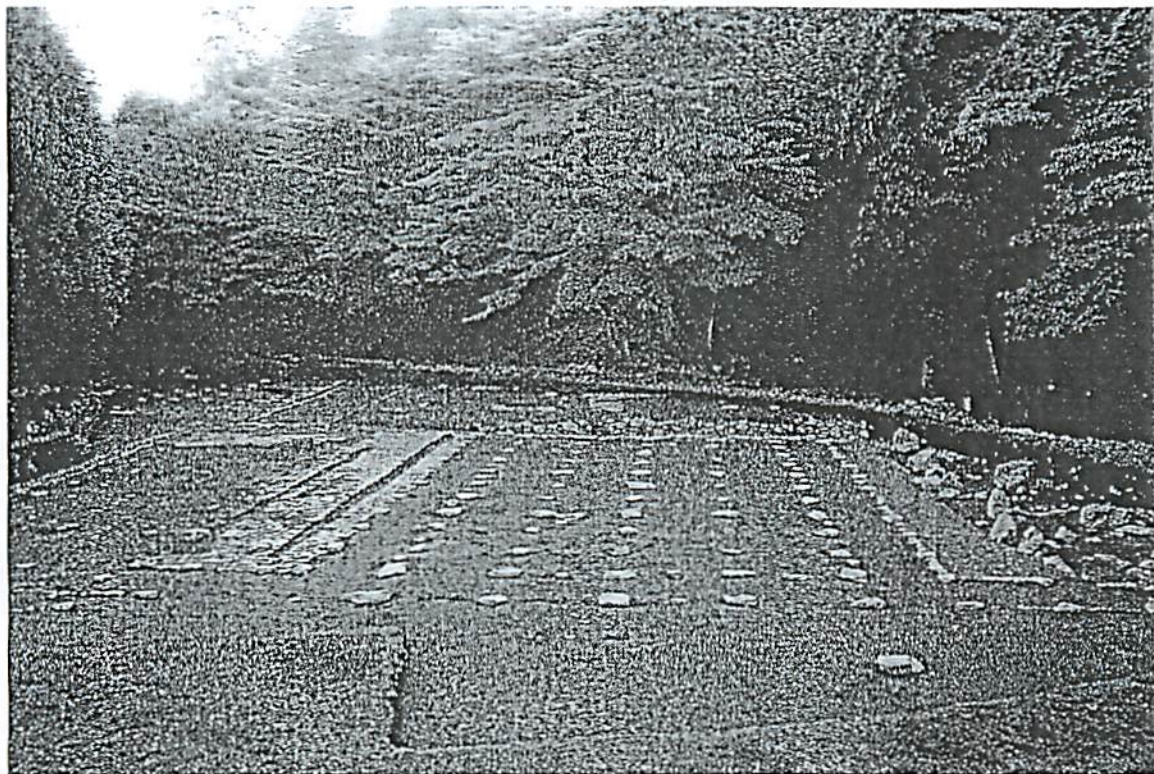
昭和20年8月2日午前(深夜0時45分)突然空襲が始まり、アメリカB29、169機の編隊による焼夷弾爆撃で市街地の9割が灰燼に帰しました。この時投下された焼夷弾は合計1,600トンで、3月10日東京大空襲の総投弾量1,665トンと比較して非常に大量であった。八王子が攻撃目標とされた理由は、米軍資料によると、既に攻撃対象として選ばれていた66都市の内、それまで攻撃を受けていない都市(東京近郊のためか)で、真夜中にも拘わらず適切なレーダー写真と情報があったことによるといわれています。しかし米軍の認識は、八王子を、東京から本州北半分への鉄道交通の要衝で、周辺の軍需工場労働者の住む住宅密集地とみ

ている等、そこには少なからず米軍独自の八王子に対する認識が反映されていたといえるようです。



この日の死亡者は406名に及んでいます。

八王子城について



八王子城跡御主殿礎石建物跡

戦国時代(ほぼ16世紀)、相模(神奈川県)小田原に本拠をおいた北条氏は、鎌倉時代の北条氏に対して後北条氏、または小田原北条氏と呼ばれている。伊勢新九郎(早雲)により政権の基礎が築かれ、二代氏綱、三代氏康、四代氏政、五代氏直と五代100年の間に、関八州に覇をとなえるようになった。

八王子城は、北条氏の支城領主となった氏康の次男氏照によって築かれた城である。その構造は急峻な地形を利用した要害部(地元でいう城山)と、城主氏照の居館(御主殿と呼ばれている)を中心とした居館地区、家臣団の屋敷や寺院跡の伝承地を含む根小屋地区、外郭の防御施設群、そして現在の元八王子町一〜二丁目に広がる城下町地区からなっている。戦国時代末期(天正10年以降の築城とする説が有力である)の城としては、珍しい大規模な山城といえよう。

一般に、この時期は城郭が平城化する傾向がみられるが、丘陵に立地する滝山城から、八王子城を新しく築き、まれにみる大城郭を構想していたらしい氏照の意図は、かならずしも明らかとなっていない。氏照は、八王子城が未完成のまま移城したようであり、天正14年(1586)末以降豊臣秀吉の来攻に備えた臨戦体制をとりながら、急ピッチで築城工事が続けられた。しかし、天正18年(1590)6月23日、秀吉の命を受けた前田利家、上杉景勝に率いられた北国勢により、小田原籠城中の城主氏照を欠いたまま一日にして落城している。

この八王子城の落城は、小田原城の開城をうながし、北条氏の滅亡につながる。そして、八王子城を含む関東一帯は、新領主徳川家康の支配下になり新時代を迎えることになるのである。

八王子城の要害地区、居館地区および根小屋地区からは、陶磁器を中心とした多種多様な遺物が出土したり、採集されたりしていて、戦国大名の生活と文化を垣間みることができる。その特徴の一つは、中国元代(14世紀)の青白磁や青磁にみられる高級調度品(書院の座敷飾り)をはじめ、茶道具(茶碗・茶入・茶臼)、花器(花生)、香道具(香炉)などの品々が豊富なことである。これは、城主氏照の居館に書院や茶室が設けられていて、合戦のあい間に茶の湯・生け花・聞香などの優雅な生活が盛んに行われていたことを物語っている。一方、日常食器としては、やはり中国明製(16世紀後半)の青花(染付磁器)を愛用していたらしく、特に天正年間(1572年以降)になって輸入され始めた新デザインの青花が主体を占めている。これは全国的にも珍しく、八王子城出土陶磁器の大きな特徴となっている。また、国産の陶器も豊富であるが、瀬戸、美濃地方の茶碗や皿、摺鉢、備前や信楽、常滑の壺など各地のものが招来されている。また、陶磁器以外にも、鉄砲の玉、中国銭、武具の一部、石臼、硯、棹秤の分銅、物差など興味深い品々が採集されていて、城主の生活以外にも、戦国時代の様々なレベルの生活を考えるための資料を提供してくれている。平成4・5年度に実施した御主殿の発掘調査では、大型の礎石建物跡や庭園などが発見され、ベネチア産のレースガラスや五彩磁器も出土した。



青花菊牡丹図皿



青花団龍鳳図皿



青花鳥鹿蜂猿図皿



青花人物図皿



青花壽字皿



青花鹿図小皿



五彩波地舞鶴図皿



五彩獅子図皿



ベネチア製レースガラス器



青白磁梅瓶



青花人物図碗



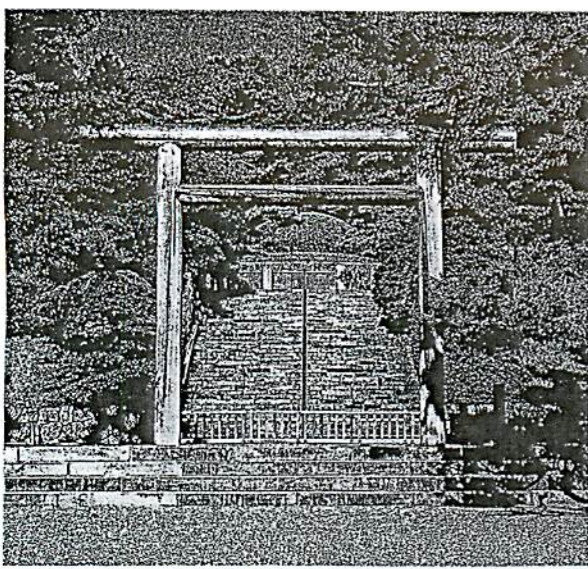
瑠璃釉碗



青磁香炉

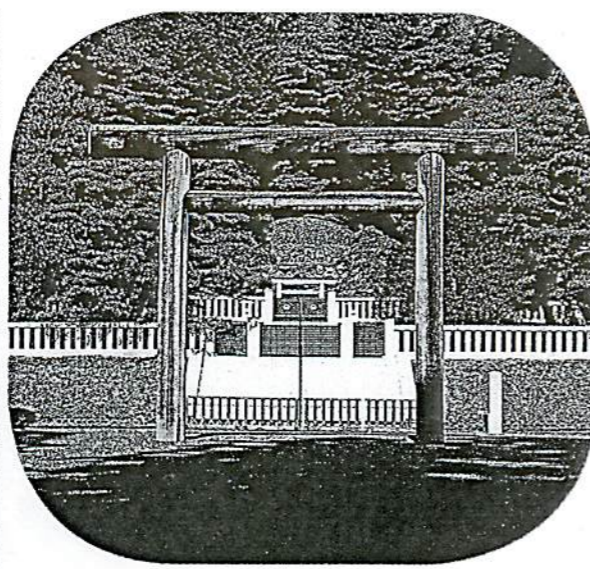


青釉小皿



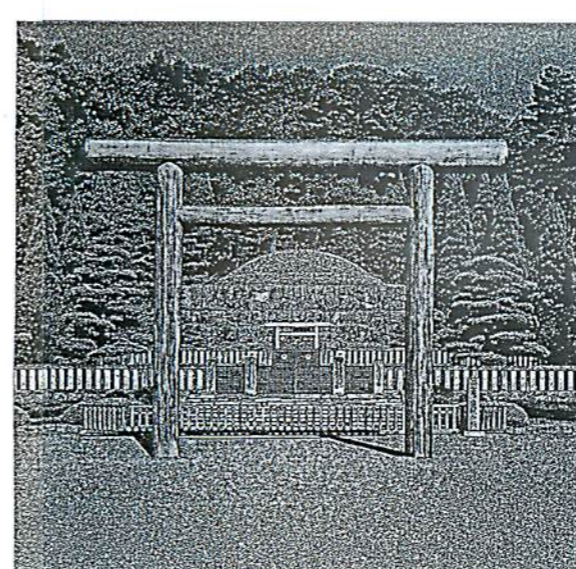
大正天皇 多摩陵

- 大正天皇(第123代) 明治天皇の第三皇男子。御名は嘉仁：明治12年8月31日御誕生になり、大正15年12月25日神奈川県葉山御用邸附属邸で崩御(御年47歳)され、昭和2年2月7日・8日大喪儀(斂葬の儀)が行われました。
- 陵名の由来：万葉集などに出てくる「多摩の横山」及び日本霊異記・続日本後紀などに見られる武蔵国の中心「多摩(麻・磨)郡」にちなみ、「多摩陵」と定められました。
- 陵形：上円下方です。これは明治天皇伏見桃山陵などを範に定められました。
- 墳塋：上円部が3段、下方部が3段、総高10.61メートルとなっています。
- 兆域(面積)：御拝所に鳥居を配し、周囲には御生前御愛好になった盆栽・庭木等を植栽、面積2,500平方メートルを画しています。
- 陵の営建：昭和2年5月2日に起工し、同年12月23日に竣工しました。



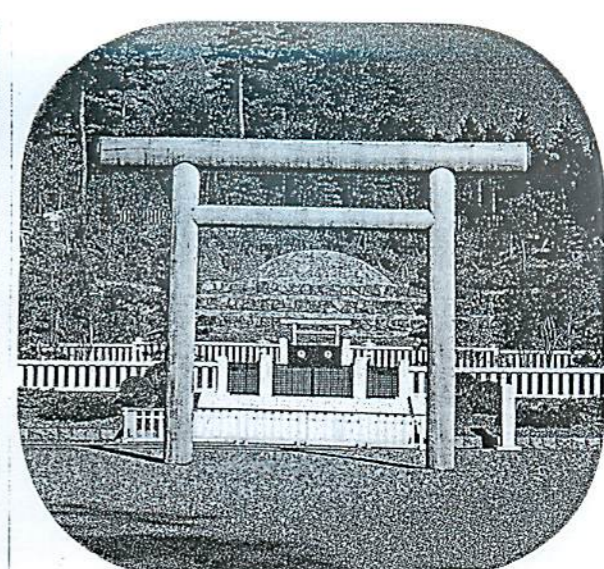
貞明皇后 多摩東陵

- 貞明皇后 大正天皇の皇后。御名は節子：公爵九條道孝の第四女として明治17年6月25日御誕生になり、明治33年5月10日皇太子嘉仁親王と御結婚、明治45年7月30日皇太子嘉仁親王(大正天皇)の踐祚(即位)とともに皇后となられ、大正15年12月25日の天皇崩御の後は皇太后としてお過ごしでした。昭和26年5月17日大宮御所(赤坂御用地)で崩御(御年66歳)され、昭和26年6月22日大喪儀(斂葬の儀)が行われました。
- 陵名の由来：大正天皇多摩陵の東方に設けられたので、「多摩東陵」と定められました。
- 陵形：上円下方で、大正天皇多摩陵と同形ですが、規模が少し小さくなっています。
- 墳塋：上円部が3段、下方部が3段、総高6.25メートルとなっています。
- 兆域(面積)：御拝所に鳥居を配し、周囲には御生前御愛好になった梅・桃等50余種の草木を植栽、面積1,800平方メートルを画しています。
- 陵の営建：昭和26年9月10日に起工し、翌年5月1日に竣工しました。



昭和天皇 武蔵野陵

- 昭和天皇(第124代) 大正天皇の第一皇男子。御名は裕仁：明治34年4月29日御誕生になり、昭和64年1月7日皇居で崩御(御年87歳)され、平成元年2月24日大喪の礼・大喪儀(斂葬の儀)が行われました。
- 陵名の由来：「武蔵野」は、古く万葉集にも見られますが、昭和天皇は、御製にも「武蔵野」をお詠みになり、またその自然を愛されたことで由縁があることから、「武蔵野陵」と定められました。
- 陵形：上円下方で、大正天皇多摩陵と同形です。
- 墳塋：上円部が3段、下方部が3段、総高8.75メートルとなっています。
- 兆域(面積)：御拝所に鳥居を配し、周囲には御生前御愛好になった桜・アケボノスギ(メタセコイア)等草々55種を植栽、面積2,500平方メートルを画しています。
- 陵の営建：平成元年4月17日に起工し、翌年1月6日に竣工しました。



香淳皇后 武蔵野東陵

- 香淳皇后 昭和天皇の皇后。御名は良子：久邇宮邦彦王の第一王女として明治36年3月6日御誕生になり、大正13年1月26日皇太子裕仁親王と御結婚、大正15年12月25日皇太子裕仁親王(昭和天皇)の踐祚(即位)とともに皇后となられ、昭和64年1月7日の天皇崩御の後は皇太后としてお過ごしでした。平成12年6月16日吹上大宮御所で崩御(御年97歳)され、平成12年7月25日大喪儀(斂葬の儀)が行われました。
- 陵名の由来：昭和天皇武蔵野陵の東方に設けられたので、「武蔵野東陵」と定められました。
- 陵形：上円下方で、昭和天皇武蔵野陵と同形ですが、規模が少し小さくなっています。
- 墳塋：上円部が3段、下方部が3段、総高6.25メートルとなっています。
- 兆域(面積)：御拝所に鳥居を配し、周囲には御生前御愛好になった、桃・バラ等草木40種を植栽、面積1,800平方メートルを画しています。
- 陵の営建：平成12年9月25日に起工し、翌年6月15日に竣工しました。

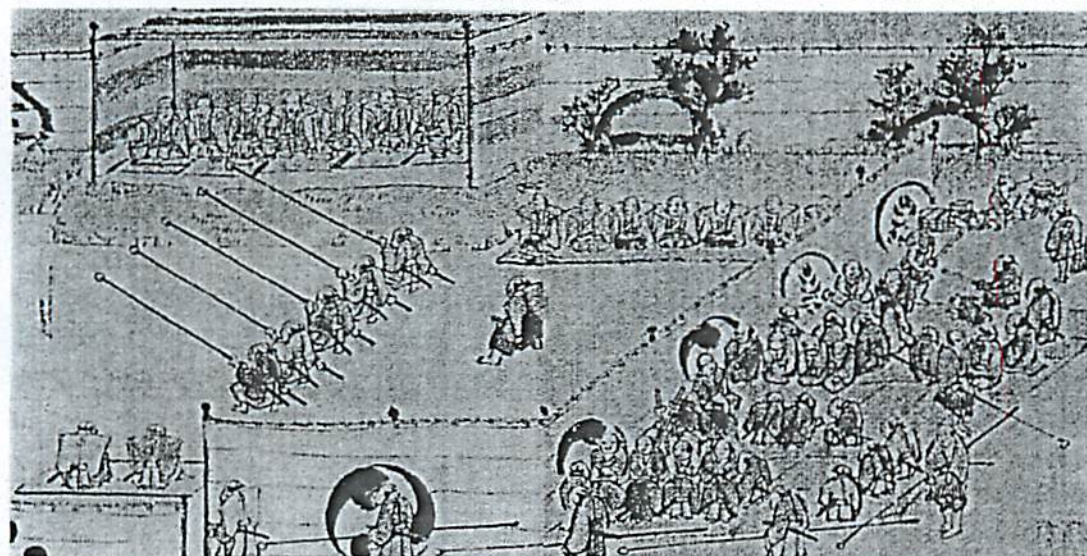
★「多摩陵と八王子」の開設時の様子・影響などは以下の通りです。

- ・大正天皇の崩御は、大正15年12月25日。大正天皇の陵は、八王子市に築造されることになった。歴代天皇陵は京都・奈良中心にあって、関東(東京付近)には、初めてのことであるから、日本の騒ぎは大きく、八王子のどこに設定されるのか注目の問題となった。
- ・当時、東京府南多摩郡元八王子村、横山村、浅川村の境界地域で、横山村龍ヶ谷戸に玄宮が決り、宮内省は大林組に命じて工事を急がせた。八王子市を初め関係村役場は、在郷軍人・青年団・婦人会を総動員して奉仕活動をした。
- ・工事が進むと陵の命名式があった。「多摩陵」という名が閑院宮載仁親王に御染筆になった。(御葬の総裁は閑院宮載仁親王) 尚、当親王は昭和20年6月18日、御自分が国葬に葬儀は代々木練兵場(現：代々木公園)にて執り行われ、多摩御陵に埋葬された。
- ・大正天皇御大葬の夜、多摩陵御沈魂の暁は、寒気が強く奉仕の人たちは手を凍らせた。
- ・多摩陵の一般参拝が許されると全国からの参拝客で浅川駅(高尾駅と改名)や八王子駅を下車し、甲州街道をぞろりぞろり徒歩行列が5kmも7kmも続いた。
- ・東浅川駅という皇族専用駅ができたのは、その時のこと。(起点は新宿御苑仮停車場) ・暫くの間、天皇霊柩車が据え置かれた。その後、皇族方の多摩陵ご参拝の際には当駅が利用され、また昭和26年6月、貞明皇后の御大葬の際にも利用されたが、東浅川駅は、その後、自動車か浅川駅のご利用が多くなり、昭和35年廃止。駅舎は市に下賜されたがH2年過激派爆弾テロにて焼失。
- ・多摩陵の設定は、八王子市地方の発展に大きな影響を寄与し、八王子の相貌を変えていったことは否めない。(甲州街道の拡幅・ハイヤー増加がそれである) ※現在は教育施設駐車場に。
- 昭和12年には、西八王子駅が開設され、八王子駅が大改築された。

・(参考) 昭和64年1月7日に崩御した昭和天皇の大喪の礼は、同年(平成元年)2月24日、内閣の主催(大喪の礼委員会委員長・竹下登内閣総理大臣)にて挙る。

八王子千人同心

八王子市上野町33
〒192-0426(22)8939
発行 1997. 7. 15



郷土調練（極楽寺蔵「桑都日記続編」）

八王子市街を東西に走る甲州街道（江戸時代には甲州道中と呼ばれていた）に沿った一角には、「千人町」という街並がある。ここは、江戸時代、千人同心という幕府家臣団の一組織に貸与された、千人頭10家の拝領屋敷と10組の同心の一部が居住する組屋敷が立ち並ぶ武家屋敷町であった。明治維新とともに、これらの屋敷は明け渡され、現在ではその面影もない。

千人同心の母体となったのは、甲斐武田氏の小人頭に率いられた軍事集団であった。天正10年（1582）武田氏が滅ぼされると、徳川家康の配下となり、今から400年余り前の天正18年（1590）家康が関東の領主になるにあたり、甲斐国境を警備する目的で八王子へ移されたと伝えられている。それ以来、278年間、明治維新により解体するまで、その本拠地は八王子から移転することはない。「八王子千人同心」と呼ばれているのは、そのためである。

千人同心は、最初は小人頭9人が率いる250人程の組織であったが、天正19年（1591）には頭を一人増やして10人とし、同心も500人となる。さらに、慶長4年（1599）には、関ヶ原の戦いに備えて同心を1000人に増やし、文字どおり千人同心の組織が成立した。以後、千人同心は、幕府の旗本である千人頭に預けられた御家人組織として、組頭100人、組頭の従者である持添抱同心100人、平同心800人で構成される。それぞれが、千人頭10人に均等に配属されて、10組100人ずつの組織であった。

その後、寛政4年（1792）に寛政の改革の一環として組織改正が行われ、組頭の持添抱同心を廃止して、同心は100名減員となる。そして、明治維新によって組織が解体するまで、時には欠員を生じながらも、千人同心の定員は900人を維持した。千人同心は、千人町の組屋敷に90人前後が居住していたほか、残りの大多数は八王子近在の農村に居住し、公務に携わるとき以外は農民としての日常生活を送るという半士半農の存在であった。

千人同心の公務は、初めの頃は関ヶ原の戦いや大坂の陣などの軍務が中心であったが、泰平の世になるにつれて、将軍の上洛や日光社参の供、江戸城修築時の警備などを務めた。そして、慶

安5年(1652)6月に日光火の番が命じられ、神君家康をまつる東照宮の防火と警備が任務の中心となり、幕末までの間、途切れる事なく勤番が続けられる。日光での勤番は、年代によって異なるが、寛政3年(1791)以降は千人頭1人と同心50人(のち45人)による半年交代であった。

寛政の改革の前後から、南下するロシア人との接触が頻繁になるにしたがって、幕府は国防の必要から蝦夷地(現在の北海道)を重視するようになる。幕府の動きに応じて寛政11年(1799)千人頭原半左衛門は、千人同心の子弟を率いて蝦夷地に渡り、防衛の任務に着きたいという願書を提出した。翌12年(1800)幕府の許可が出ると、弟原新介と共に、100人の同心子弟を率いて蝦夷地に渡り、半左衛門は白糠(北海道白糠町)に、新介は勇武津(苫小牧市)に入植



千人頭 石坂弥次右衛門義礼(中央)



千人同心組頭二宮左門太光鄰

する。しかし、この計画も北辺の厳しい気候や風土に耐え切れず、多数の犠牲者を出して数年で中止せざるを得なかった。

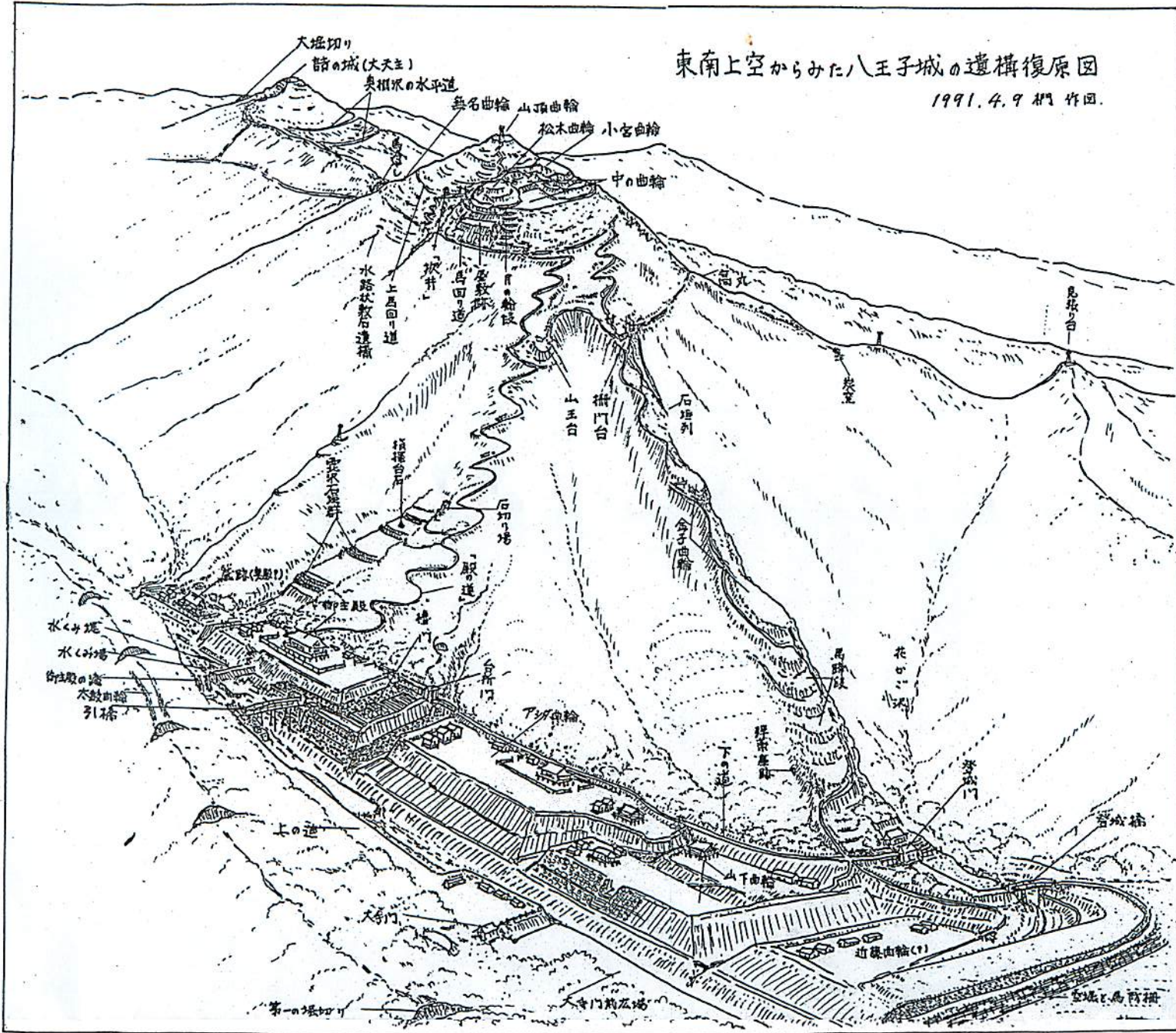
幕末になると、幕府の軍制改革にともなって、安政2年(1855)には千人同心にも西洋銃修業が命じられる。やがて砲術訓練から本格的な銃隊による練兵教練へと進んでいく。このように近代的な軍事訓練を受けた千人同心は、文久3年(1863)鎗奉行配下から講武所奉行配下へと移り、慶応元年(1865)には陸軍奉行配下の一部隊として活動することになった。翌年には千人隊と改称され、千人頭は千人隊の頭と称されるようになる。この間、文久3年(1863)の將軍家茂の上洛供奉を皮切りに、甲州出兵、第二次長州出兵、横浜警衛などに矢つぎばやに動員されていった。

しかし、明治維新により慶応4年(1868)6月、千人隊の組織は解体され、278年間続いた八王子千人同心もその最後を迎えた。大多数の同心家は「脱武」の道を選んじ、農民となったのである。

八王子城の遺構復原図

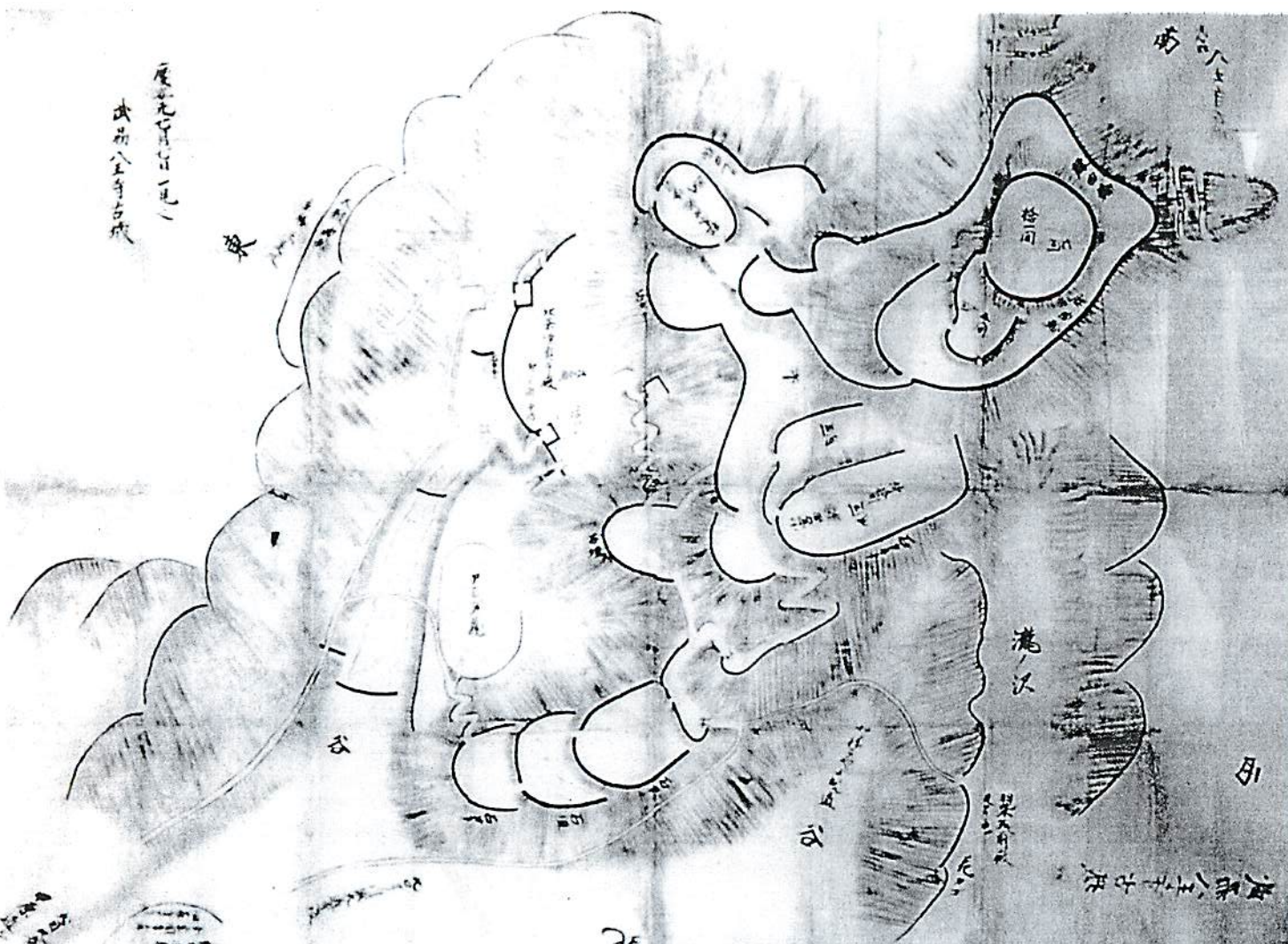
東南上空からみた八王子城の遺構復原図

1991.4.9 制作



八王子古城図（慶安の城絵図）

慶安元年（1648）7月7日の銘が記され、伝・大天守部分は、描かれていない。曲輪配置はかなり正確で、御主殿に渡る為の2ヶ所の橋（中央左寄り）が見られる。尾根筋北側（図では下側）と御主殿背後を中心に「石垣」と記されています。これが描かれたのは、八王子城落城の58年後です。（これは正保元年（1644）幕府が諸藩に命じて作成させた城絵図と想定）



慶安元年七月七日
武州八王子古城

<p>初代 北条早雲</p> <p>永享4(1432)頃 寛正5(1464) 文明7(1475)頃 文明8(1476)頃 文明15(1483) 長享元(1487)</p> <p>延徳3(1491) 明応4(1495)</p> <p>明応5(1496) 文亀元(1501) 永正元(1504) 永正3(1506)</p> <p>永正5(1508) 永正7(1510) 永正8(1511) 永正9(1512) 永正10(1513) 永正12(1515) 永正13(1516) 永正15(1518)</p>	<p>永享4(1432)~永正16(1519) 正室 (小笠原政清の娘 南陽院殿)</p> <p>早雲(伊勢新九郎盛時)誕生 備中伊勢氏の高越山城城主伊勢盛定の子として生まれ、京へ上り、京都伊勢貞高の養子となる 足利8代将軍 義政の弟、義視の近仕となる 足利家の後継者争い(応仁の乱の引き金とも言える争いに巻き込まれる) 早雲と6人の仲間達の約束 (荒木兵庫・大道寺太郎等全部で7名、「誰か大名になったら他の6人、その家人となり、その人を盛りたてる約束」) 甥、龍王丸(氏親)と、小鹿範満の今川氏の家督争いを開始 室町幕府9代将軍義尚の「申次衆もうしつぎしゅう」となる 早雲、小鹿範満を討ち、今川氏の家督を氏親に継ぐ 興国寺城主となる…実質的に今川氏親の後見になる 早雲の嫡男、氏綱誕生 伊豆討ち入り、伊豆一国を手中に 甲斐に討ち入り武田信縄と和睦 小田原城を略奪、大森藤頼を倒す(シカ狩りの名目で勢子を入れ、千頭の牛の角に松明を火をつけ暴走させ襲撃、一挙に攻め落とす) 相模西部で山内上杉顕定と戦う 甲斐吉田へ出陣 扇谷上杉朝良の援助のため山内上杉顕定と戦う 今川氏親の要請で三河に出陣、今橋城を落とす 足柄下郡に検地をおこなう 三河へ出陣 山内・扇谷両上杉氏により早雲の武蔵権現山城落ちる==早雲大敗 扇谷上杉朝良と和睦 三浦道寸の岡崎城を落とす 新井城(三浦氏)を攻める==鎌倉に玉縄城を築く /三浦方の三崎城を攻める /三浦方の太田資康を打ち破る 氏綱の長男(孫)氏康が生まれる 新井城を落とす(三浦道寸・義意の親子が自刃) 早雲、家督を子、氏綱に譲る 「虎印判状」が登場 印に彫られた文字「禄寿応隠」 ==この印鑑はこの後80年間にわたり北条家使用</p>
<p>二代 北条氏綱</p> <p>永正16(1519)</p> <p>大永2(1522) 大永4(1524) 大永5(1525) 大永6(1523)</p> <p>享禄2(1530)</p> <p>享禄4(1532) 天文2(1533)</p> <p>天文4(1535)</p>	<p>長享元(1487)~天文10(1541) 正室 (正室:養珠院)</p> <p>早雲、葦山城にて死去 氏綱、早雲の盛大な葬儀を執り行い、箱根湯本に早雲寺を建立 氏綱、古賀公方足利高基と同盟 江戸城扇谷上杉朝興の家老・太田資高を北条方に寝返らせる /上杉朝興を江戸城に攻め込む 対扇谷朝興、岩付城合戦 /対扇谷朝興、葛西合戦 /対扇谷朝興、葛西城合戦 /対扇谷朝興、白子原合戦 上杉朝興の軍が北条方藤城を攻撃 /上杉朝興の軍が北条方小沢城を攻撃 /上杉朝興の軍が北条方玉縄城を攻撃 /房総里見実堯が鎌倉放火 氏綱、鶴岡八幡宮の再建 氏綱房総半島で里見実堯を久留里城に攻める 氏康、上杉朝興と多摩川河原の小沢原で激突 上杉朝興、岩付城を太田資頼により奪回 上杉朝興、相模に攻め込む 氏綱、上杉朝興と同盟した甲斐・武田信虎を攻める</p>
<p>天文6(1537)</p> <p>天文7(1538)</p> <p>天文10(1541)</p>	<p>氏綱、上杉朝興勢の河越城に攻め込む 上杉朝興、河越城にて死去 /氏綱、河越城を攻め河越城を手中に入れる 上総の武田信隆と弟・信応の間で家督争い勃発(信隆は、北条に支援を求め⇒援軍を送る) 「甲駿同盟」…今川義元と武田信虎の甲駿同盟成立⇒北条は今川と断交、上杉朝興・武田信虎・今川と敵対関係 氏綱、下総国府台に出陣し、足利義明・里見義堯に勝利 氏康の嫡男・氏政が誕生 氏綱55歳で病没</p>
<p>三代 北条氏康</p> <p>天文10(1541)</p> <p>天文13(1544)</p> <p>天文14(1545)</p> <p>天文15(1546)</p> <p>天文16(1547)</p> <p>天文19(1550) 天文20(1551) 天文21(1552) 天文23(1554)</p> <p>弘治2(1554)</p> <p>永禄元(1558) 永禄2(1559)</p>	<p>永正12(1515)~元亀2(1571) 正室 (正室:瑞溪院(今川氏親の娘))</p> <p>氏康、27歳で北条家家督を継ぎ、3代目当主に 上杉軍と北条軍が激突(氏綱の死が、関東各地に伝わると直ぐに扇谷上朝政が河越城奪還のため動き、双方激突) 氏康、安房で里見氏と激突 氏康、今川義元と激突 山内上杉憲政、扇谷上杉朝政、古河公方足利晴氏が北条方の河越城攻撃 武田信玄 北条氏康、山内憲政、今川義元の講和をはかる(甲相駿の三国同盟の伏線) 河越夜戦(氏康は河越城を守る義弟、北条綱成と僅か8千の軍勢で、8万ともいわれる山内上杉憲政、扇谷上杉朝政、古河公方足利晴氏連合軍を撃破) これにて氏康の武蔵支配は決定的となる 松山城の上田朝直、滝山城の大石定久、天神山の藤田邦房が北条に下る(大石氏には三男氏照・藤田氏には四男氏邦が養子となる) 氏康、下総相馬に軍勢を派遣 岩付城の太田資正も北条に下る 氏康、税制を改革 氏康、北武蔵に出陣し、築田春助と盟約 御嶽城を攻略、上野平井城を攻略、山内上杉憲政を越後へと追いやる 氏康、今川氏の領国駿河へ攻め込む 「甲相駿三国同盟」…武田信玄と北条氏康と今川義元との甲相駿三国同盟成立 (太原雪斎 富士市善徳寺にて) (信玄の娘、黄梅院⇒北条氏政に・氏康の娘、早河殿⇒今川氏真に嫁がせる) 氏康、古河公方足利春氏を破る 氏康、相模に進出してきた里見義弘と激突するも敗北 氏康、結城政勝の援助で常陸に出陣、海老ヶ崎で小田方を破る 氏房、房総に軍勢を遣わす 氏康、小田原衆所領役帳をまとめる 氏康(45歳)、嫡男氏政(21歳)に家督を譲る…しかし氏康は「御本城様」と呼ばれ、若き当主・氏政の後見として辣腕をふるった</p>
<p>四代 北条氏政</p> <p>永禄3(1560)</p> <p>永禄4(1561) 永禄5(1562) 永禄6(1563)</p>	<p>天文7(1538)~天正10(1570) 正室 (黄梅院(武田信玄の娘))</p> <p>越後上杉謙信が、岩下、沼田城などを攻撃 氏康、松山城に入る 小田原城下に入った上杉謙信(10万の軍勢)に対し、北条方は籠城作戦に出る…謙信この時、八王子を通過 氏康、上野・武蔵の上杉方の城を攻め、松山城を包囲 氏康、松山城を落城</p>

永禄7(1564)	第二次国府台合戦 氏康、里見氏と対戦し勝利する 岩付城の太田資正・氏資を攻撃 上総土気城主、酒井胤治が北条に従う
永禄8(1565)	13代将軍・足利義輝戦死(永禄の変:松永秀久)。弟・義榮が将軍に就任
永禄9(1566)	上杉謙信が関東に出兵、佐野城に入る 上野金山城の由良成繁・国繁が北条方に内通
永禄10(1567)	佐野城の佐野昌綱が北条に従う 厩橋城の北条高広、下総の築田春助・持助が北条に内通 里見義弘が上総三船台城を攻め、岩付城の太田氏資らが戦死 →氏政は、次男氏房を岩槻城城主に置く 武田信玄の長男・義信自害
永禄11(1568)	甲斐武田信玄が駿河今川を侵略 ※この年、氏照が栗橋城主となる 氏康、今川に援軍を送る 「甲相同盟破棄」…氏康は、氏政の妻、黄梅院を甲斐へ送り返し、甲相同盟破棄
永禄12(1569)	信玄、甲府に撤退 氏政、長男・氏直を今川氏真の養子とし、今川氏を継承 「越相同盟」成立
9/末、「廿里(とどりの)の戦い」…信玄は北条氏照の滝山城を攻める(三の丸まで攻め、途中から小田原へ向かう)…信玄小田原城包囲(北条籠城で対応) 10/8「三増峠合戦」…北条氏照・氏邦が三増峠で小田原から甲州へ帰る信玄待ち伏せ。小田原からの氏政軍との決戦作戦も氏政到達できず北条大敗	
元亀元(1570)	「越相同盟」が本格化し、氏康の八男・三郎(景虎、上杉謙信の養子)が越後へ赴く 武田信玄の進撃(伊豆韮山城や駿河の異国寺城など)
元亀2(1571)	氏康が53歳で病死 氏政、「越相同盟」を破棄し、「甲相同盟」を復活させる
元亀3(1572)	羽生城を攻める 佐竹氏・宇都宮氏と下野多功原で戦う ※岩槻城代の北条氏繁が、越谷大聖寺へ「掟書」出状
天正元(1573)	織田信長が将軍・足利義昭を追放し、室町幕府滅亡 羽生城・関宿城・水海城を攻める
天正2(1574)	上杉謙信と北条軍対陣 結城晴朝が氏政に従い、築田晴助が関宿城を開城(氏照城主を兼ねる)
天正4(1576)	氏政、多賀谷氏佐竹義重を攻める
天正5(1577)	「甲相同盟強化」…武田勝頼、氏政の妹、桂林院を妻に迎える(後室)⇒5年後には、氏政も信長に加勢して甲斐武田家を滅ぼす 氏直初陣、常陸小田城の梶原政影を攻める
天正6(1578)	氏政、里見義弘と退陣後、講和
天正7(1579)	上杉謙信の養子・景勝と三郎景虎(氏康の八男)の上杉家督争い「御館の乱」 鮫尾城で三郎景虎は自害(北条の援軍間に合わず)。上杉の家督は景勝が継ぐ 氏政、再び武田勝頼と対陣
天正8(1580)	「甲佐同盟(こうさどうめい)」:戦国時代の軍事同盟。甲斐国の武田氏と常陸国の佐竹氏の間で成立した同盟。(天正7(1579)頃) 双方の当主は武田勝頼と佐竹義重で、相模国の後北条氏を対敵として機能した。 氏政(43歳)は、嫡男・氏直(19歳)に家督を譲る…しかし氏政は、父氏康同様、若い当主の後見として辣腕をふるった

五代 北条氏直 永禄5(1562)～天正19(1591) 正室(徳川家康二女 督姫)

天正10(1582)	織田信長・徳川家康+北条氏政(関東口より攻込む)が甲斐武田氏(武田勝頼)を滅ぼす ※甲州征伐 (上記僅か3ヶ月後)…信長本能寺にて殺される ※天目山の戦い 北条、滝川一益と戦う「神流川合戦」…北条勝利 徳川軍と北条軍は若神子で対陣⇒2ヵ月後、両者の和解が成立
天正11(1583)	徳川家康の次女、督姫が氏直の妻となる
天正17(1589)	氏直、弟氏規(幼少期今川に送られ、そこで家康と隣同志だったので好があった)を上絡させる 北条方、猪俣邦憲が真田領「名胡桃城」を攻める⇒これにより、豊臣秀吉は、北条攻めを決定⇒1ヶ月後秀吉は戦線布告 これに対し北条方は、100ヶ所にも及ぶ城々で籠城作戦。(かつて謙信や信玄にも破られなかったためと己の力の過信で秀吉勢を甘くみた)
天正18(1590)	小田原城合戦、豊臣秀吉による北条攻め=北条氏小田原開城、降伏⇒北条宗家は断絶 秀吉軍 ①北国勢(前田利家・上杉景勝・真田昌幸ら35,000人)…3月末上野国へ侵攻開始。 ②徳川勢・東海道北上軍(家康・羽柴秀次・織田信雄・浅野長吉ら170,000人) ③秀吉本隊32,000人 ④水軍(九鬼嘉隆・嘉藤嘉明・長宗我部元親・脇坂安治ら14,000人) (4隊総合計251,000人 VS 北条の小田原籠城軍 50,000人余りまたは北条軍総合計82,000人のなどの説あり)
4月/10 投降	松井田城 城主大道寺政繁は戦わず開城。以後前田軍の先頭に立って北条攻めに加担。小田原落城後、秀吉の沙汰で大道寺は処刑
5月/01 投降	河越城 ※日本三大夜戦の一つ=1546(天文14)河越夜戦(氏康時代)
5月/22 投降	岩槻城…26年3月岩槻市訪問予定(渡辺G)
6月/14 投降	鉢形城…25年2月探訪(第435回 篠原Gの資料参照ください)
6月/23 投降	八王子城…25年11月今回 渡辺G探訪 ※日本五大山城(山岳城)の一つ
7月/06 投降	小田原城
7月/14 投降	忍城…25年9月探訪(第441回 篠原Gの資料参照ください) ※日本三大水攻めの一つ=石田三成VS成田長親
降伏後の「主要人物その後」	
北条方責任者沙汰①第4代藩主氏政②氏政の弟・氏照(八王子城主)③重臣・松田憲秀④大道寺政繁(松井田城主:前田・上杉軍に最初に投降、北条攻め先頭に) 切腹(介錯人として氏政の弟、氏規=蕪山城主)	
第5代藩主氏直 高野山に蟄居。妻=家康の娘、督姫なるためか、その後許されて足利藩主・近江藩に取立て	
五代氏直の弟(氏房=岩槻城主)…氏直と一緒に高野山へ蟄居。その後肥前藩(寺沢広高)預かりに。(注)氏房は一般的には3歳で岩槻城主にと言われている	
氏政の弟、氏規及び玉縄北条氏勝・大道寺直繁・松田直憲らも高野山へ蟄居。	
氏政の弟、氏邦(鉢形城主):金沢前田家に1000石召抱え	
氏照家臣、中山家範の子孫・信治は、水戸徳川家の家老に、直張は、久留里藩主に(注)信治が、八王子城籠りに「氏照の墓」を建てた	
忍城城主、成田氏長(「のぼうの城」の主人公の藩主)は、会津の蒲生氏郷に仕え、また主人公、成田長親は、氏長と共に会津に一時身を寄せた後、 下野国烏山へ移り住むも氏長と不和になり出奔し、出家して自永齋と称した。 そして更に晩年は家康の信を得て尾張国に住む。慶長17年12月4日(1612)、68歳で死去した。	

出典:インターネット「戦国北条氏のすべて」より転記

参考:主な登場人物の「生没年表」…後北条は除く (年齢は、「没年-生年 + 1歳」にて算出)

武田信虎:1494~1574=81歳	今川義元:1519~1560=42歳	徳川家康:1542~1616=75歳	呑龍上人
武田信玄:1521~1573=53歳	上杉謙信:1530~1578=49歳	見性院:1545~1622=78歳	1556~1623=68歳
武田勝頼:1546~1582=37歳	織田信長:1534~1582=49歳	保科正之:1611~1672=62歳	
★見性院は3列	松姫(信松院):1561~1616=56歳	豊臣秀吉:1537~1598=62歳	武田信吉:1583~1603=21歳



旧 東浅川駅（皇族専用駅）、大正天皇・同皇后のご大葬及び皇室ご参拝に使用

参考資料

NPO 法人 越谷市郷土研究会資料

歴史と浪漫の散歩道

越谷の歴史解説と写真（古代～近代）

図説 八王子・日野の歴史

八王子市公式ホームページ

多摩の歴史（八王子市・日野市）

八王子資料館「歴史解説シート」

八王子市郷土資料館資料

戦国の終わりを告げた城

宮内庁管理の天皇陵一覧

松姫さま 信松院のしおり

八王子市教育委員会

越谷市公式ホームページ

俳郷土出版社（発行人 神津良子）

八王子市

武蔵野郷土史刊行会

八王子市郷土歴史資料館

八王子市郷土博物館

梶 国男

宮内庁HP「天皇陵」

金龍山 信松院